檜山庫三*: 牧野標本館雑記** (10)

Kozo HIYAMA*: Miscellany from Makino Herbarium**(10)

§**ヒメツヅラフジ** (新称)　ツヅラフジ(オオツヅラフジ)で花の無毛のものがある。1901年6月4日に岐阜県伊吹山麓で採集されたもので，採集者は不明である。これをヒメツヅラフジと新称する。

Sinomenium acutum (Thunb.) Rehd. & Wils. forma **nudiflorum** Hiyama, nov. f.

Sepala glabra. Cetera ut typica.—Nom. Jap. Hime-tsuzurafuji, nov.

Hab. Hondo: Mt Ibuki, Prov. Mino (leg.? June, 1901—type in Makino Herbarium).

§**ケナシハマハタザオ** (新称)　笹岡久彦氏が1909年5月15日に富山県上新川郡東岩瀬町(現在富山市)の海辺で採集されたハマハタザオの一つは茎や葉が無毛の変ったものであるので，これをケナシハマハタザオと新称する。

Arabis Stelleri DC. var. *japonica* (A. Gray) Fr. Schm.

forma **calvescens** Hiyama, nov. f.

Caulis glaber; folia caulina glabra vel tantum margine parce hirsuta, radicalia hirsutula.—Nom. Jap. Kenashi-hamahatazao, nov.

Hab. Hondo: Higasiiwase, Toyama, Prov. Etchu (H. Sasaoka, May, 1909—type in Makino Herbarium).

§**ミツバコンロンソウの2品**　ミツバコンロンソウですべて単一の葉を出すものがある。葉は卵～広皮針形で鋭先頭，広楔脚，長さ10～35mm，巾 5～11mm，葉縁に粗鋸歯を有し，5～12mm の葉柄がある。これは 1889年に高知県横倉山で牧野先生が採集されたものであるが，これと同型の標本が別に数枚ある。後者も牧野先生の採集品で，産地はただ土佐とあるのみである。この単葉型を**ヒトツバコンロンソウ** (新称)として区別したい。この型は既に O. E. Schulz が変種として分けているが，品種とするのが適当と思う。なお，Schulz はミツバコンロンソウの小葉の広皮針形～皮針形のものを forma *acuminata* として区別しているが，小葉の形で分けることは無理である。また松村任三博士 (植雑 **13**:52, 1899年) はミツバコンロンソウの子房を紅紫色と書かれているが，これは緑色のものもある。

また群馬県の妙義山 (1903年6月15日，新井巴) にはミツバコンロンソウの巨大なものを産する。茎は高さ 30cm になり，小葉も長さ 100mm，巾 35mm に達する。この巨大型は品種として区別することができよう。和名を**オオミツバコンロンソウ**と新称する。

* 東京都立大学理学部牧野標本館. Makino Herbarium, Faculty of Science, Tokyo Metropolitan University.

** 牧野標本館業績 第 9.

Cardamine anemonoides O. E. Schulz forma **suavis** (Schulz) Hiyama, stat. nov.

Cardamine anemonoides var. *suavis* O.E. Schulz in Engl., Bot. Jahrb. **32**-4: 341, t. 9, f. 3 (1903).

Nom. Jap. Hitotsuba-konronsô, nov.

Hab. Shikoku: Mt. Yokogura, Prov. Tosa (T. Makino, May, 1889).

forma **major** Hiyama, nov. f.

Planta elatior. Caulis cum infructescentia ad 30cm longus. Foliolum petiolulatum, terminale late lanceolatum apice obtusum, basi late cuneatum margine grossius crenato-serratum 100mm longum 35mm latum, petiolus 20-30mm longus. Fructus 40mm longus, stylus 5mm longus in fructu.—Nom. Jap. Ô-mitsubakonronsô, nov.

Hab. Hondo: Mt. Myogi, Prov. Kozuke (T. Arai, June, 1903—type in Makino Herbarium).

§ **ニシノオオタネツケバナ**（新称）山口県岩国(1912年3月30日，小野静男）産の「オオタネツケバナ」と記入のある1枚の標本がある。全形はオオケタネツケバナ（オオタネツケバナ）と同じであるが，全株無毛であって，ただ小葉の縁と萼片とがわずかに有毛で，茎や葉柄の一部にもわずかに毛の出るものがある。*Cardamine longifructus* Ohwi は同じく岩国城山の産であって，上記の「オオタネツケバナ」と同物と思われるが，標本館にも別に岩国御城山［城趾］(小野，1917年

Fig. 1. *Cardamine anemonoides* forma *major* (left) and forma *suavis* (right).

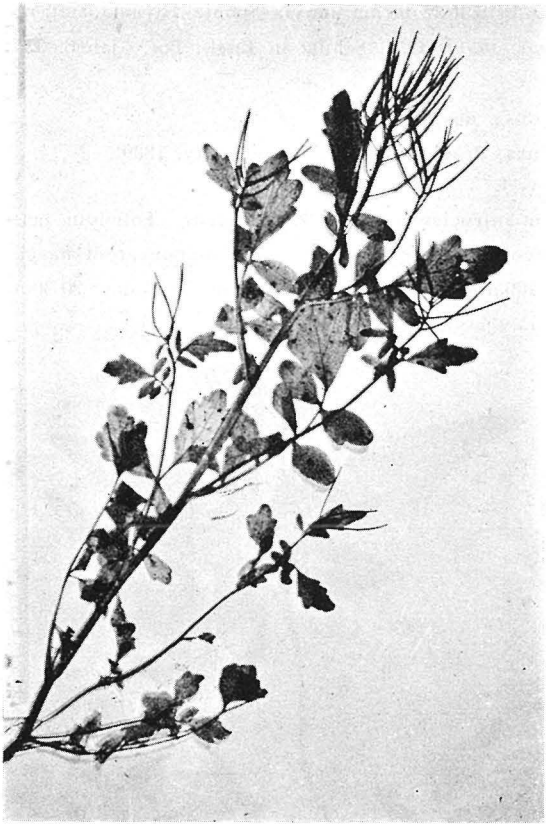


Fig. 2. *Cardamine dentipetala* var. *longifructus*.

7月)産としたものも1枚ある。これと同物と思われる中国地方産の標本の中には，小花柄のわずかながら有毛のもの（安芸，牧野富太郎，1933年）があり，また安芸三段峡（牧野，1931年）にはロゼット標本で全く無毛のものがあるが，その少葉は 5～7 個で柄があり，頂小葉は著大で円形心脚波状鈍歯縁をなし径 3～5 cm に達するものもあって，これによく似たロゼットはマルバコンロンソウでもたまに見られる。オオケタネツケバナは全株有毛のものから，一部に毛を欠いたものまであって，毛についてはかなりの変化が見られる。その分布は主として近畿地方以北の本州であるが，中国地方でも時たま見かけることがあり，広島県山県郡三段峡（牧野，1933年），島根県八束郡法吉村（三原常善，1905年）産などのものが標本館にある。ここに記する者は全株無毛な点以外はオオケタネツケバナとの間に相違は見られない。分布から見て結局これはオオケタネツケバナの西の型と考えられるので，これをニシノオオタネツケバナと新称する。ニシノオオタネツケバナはオオバタネツケバナ（ヤマタネツケバナ）に似てくるものがあるが，それよりも花が少し大形で，萼片に多少の毛があり，小葉の縁毛は明かに認められ，花柱は長さ 0.8～2mm，種子は長さ 1.5mm ばかりあることなどで区別ができる。また小葉の縁と萼に毛の出る点はオクヤマガラシとの区別にも役立つ。

Cardamine dentipetala Matsum. var. **longifructus** (Ohwi) Hiyama, stat. nov.

Cardamine longifructus Ohwi in Journ. Jap. Bot. **33**: 211 (1958).—Nom. Jap.

Nishino-ôtanetsukebana, nov.

§ **アオイヌガラシ** イヌガラシで花弁を欠いたものが稀にある。これは牧野先生が武州荻窪［現在東京都杉並区］で 1909 年に採集されたもので，花と若い果実をつけた標本が 3 枚あり，これに「イヌガラシ（花弁欠如ス)」と記入がしてある。その草丈は 40 cm 内外で，葉先もイヌガラシのようによくとがり，鋸歯端に毛がなく，葉は長さ 10cm 内外に達し，長角は長さ 10～21mm で多少曲がり且つ斜めに上向して，広く開出するようなことがなく，葯は長さ 0.7～0.8 mm で花粉吐出後には著しく曲がってくる。ごく稀に僅かに花弁の現われたものを混在している。萼片は長さ 2.5mm ある。日本のイヌガラシについては原寛博士 (植研 **11**: 623, 1935; 同 **12**: 896, 1936; 同 **30**: 193, 1955) が詳細に検討されて，無弁花種を *Rorippa dubia* Hara と命名されたが，これは主として関東以西に生ずるミチバタガラシ［ナガミイヌガラシ（小泉), non ナガミノイヌガラシ(松村)］であって，イヌガラシとは別種である。ミチバタガラシの長角は Franchet & Savatier (Enum. Pl. Jap. **2**: 278, 1876) も云っているように真直ぐで開出する点がよい特徴の一つとなっている。ところで，ここで問題になるのは，牧野先生が植雑 **4**: 301 (1890) にイヌガラシの略式花と題して「……養料の不足気候の感応等に帰すべきか其植物の茎体矮形のものには往々花弁欠如しただ萼片雄芯雌芯を遺したる略式花を見る事あり」と述べられ，また草木図説改訂版 **3**: 855 (1912) イヌガラシの条下に「庭砌等の清地に生じて其苗瘦せたるものに在ては往々花弁を欠如せる花を着くることあり」と補記されていることである。上文によれば，これはミチバタガラシを指しているようにも思われるが，それを証拠だてる標本は見つからない。すると実際に牧野先生が「イヌガラシ（花弁欠如ス)」と手記された標本がものを云ってくる。これは後にアオイヌガラシ *Nasturtium indicum* DC. forma *apetalum* Makino (牧野日本植物図鑑 517, 1940) と称された。奥山春季氏 (植研 **19**: 133, 1943) はアオイヌガラシをミチバタガラシと同物とされたが，原博士 (植研 **30**: 197, 1955) は *N. indicum* f. *apetalum* Makino に疑問符を付したうえで *R. dubia* Hara の異名に加えられた。ついでながら辻永氏万花図鑑続 2 集 180 図のイヌガラシはたぶんミチバタガラシの方であろう。ミチバタガラシの幼果は褐赤色をおびる傾向があり，また葉面には光沢がない。なお愛媛県温泉郡素鷺村中村［現在松山市］(1907 年4月21日，金川政高) 産のアオイヌガラシも一部にごく短かい花弁の出たものを混在していた。次にアオイヌガラシをイヌガラシの一員と考えた場合の学名であるが，上記のように牧野先生は *N. indicum* f. *apetalum* と命名された。しかしこれには *N. indicum* γ. *S. apetalum* (Desf.) DC., Prodr. **1**: 139 (1824) という同じ epithet を持つ名が既にあって，これは De Candolle によれば *Sisymbrium dubium* Pers. 即ちミチバタガラシであるという。*S. apetalum* Desf. は記載を伴わなかった発表で，その正体については疑問がなくもないが，原博士も *R. dubia* Hara かとされているので，これに従えば *R. indica* var. *apetala* Hochreut. も *R. dubia* と考える

方がよいことになって，牧野先生の forma *apetalum* を *Rorippa* に移すことはできないから，アオイヌガラシには *R. indica* f. *viridiflora* Hiyama という新名を与えることにしたい。

Rorippa indica (L.) Hiern forma **viridiflora** Hiyama, nom. nov.

Nasturtium indicum DC. forma *apetalum* Makino, Ill. Fl. Nipp. 517 (1940), nom. subnud.

Petala destituta. Cetera ut in typo.—Nom. Jap. Ao-inugarashi (Makino).

Hab. Hondo: Ogikubo, Tokyo, Prov. Musashi (T. Makino, 1909—type in Makino Herbarium).

§ **ミツバフウロの異品**　ミツバフウロで蕚片や小花柄に開出した長毛の出るものが東京都下の高尾山にあって 1910年10月 5 日 に牧野先生が採集されている。標本は果実をつけたもので13枚あるが，中には同じ個体でも蕚などに開出長毛のほとんど又は全くないものも混じっている。以上の点以外はミツバフウロとまず異なるところがない。これを産地に因んで**タカオフウロ**と新称することにしたい。ホコガタフウロも蕚や小花柄に開出長毛を持っているので，タカオフウロと間違えやすいが，前者は葉形を異にする外に，葉裏にはまばらに毛があって，脈上の毛と共にミツバフウロの毛のほぼ倍の長さがあり，また下部の葉はしばしば互生し且つ分裂する葉は少ない。タカオフウロはミツバフウロの一型と考えられるが，この者は中国の *Geranium Wilfordi* var. *chinense* Hara と同物と見てもよいと思う。しかし，上記したように，タカオフウロではすべての蕚片，花柄，小花柄に常に開出長毛が出るとは云えぬ。

次に武蔵武甲山で奥山春季氏が採集されたミツバフウロは茎や葉柄に開出した著しい長毛があるので変ったものであるから，これを産地に因んで**ブコウミツバフウロ**と新称する。また北海道のミツバフウロは葉裏全面に有毛な点で変った存在である。水島正美博士にお頼みして，ことのついでに北大農学部の標本について調べていただいたところによれば，28点ある北海道産ミツバフウロの標本のうち27点までが葉裏全面に伏した短毛を散生した型であって，その産地は十勝国：上足寄，釧路国：阿寒湖畔，標茶アレキナイ，釧路近傍，厚岸，阿寒湖舌辛村雪裡，北見国：利尻島クワガタ，石狩国：札幌，定山溪，日高国：冬島～幌満，様似，幌泉，膽振国：室蘭，虻田，尾札，千歳，有珠，後志国：奥尻島，神威山，銭箱，渡島国：江差カモメ島，函館山である。ただ 1 点ではあるが普通のミツバフウロ（釧路国雌阿寒山，1897年8月，川上滝弥）が北海道に見られたことは後考を要するが，ミツバフウロが北海道に入って独自の型に分化したと考えても大過ないであろう。このエゾ型はアサマフウロの九州型と同じような変異を示すもの故これを**エゾミツバフウロ**と新称する。

Geranium Wilfordi Maxim. var. **chinense** (Migo) Hara

Nom. Jap. Takao-fûro, nov.

Hab. Hondo: Mt. Takao, Prov. Musashi (T. Makino, Oct., 1910—in Makino Herbarium). New to the flora of Japan. Distr. China, Formosa and Japan.

var. **yezoense** Hiyama, var. nov.

Folia subtus tota pilis brevibus adpressis sparsim pubescentia. Centra ut in typo.—Nom. Jap. Yezo-mitsubafûro, nov.

Hab. Yezo: Asahigawa, Prov. Ishikari (T. Makino, Sept., 1908—type in Makino Herbarium). Endemic to Yezo.

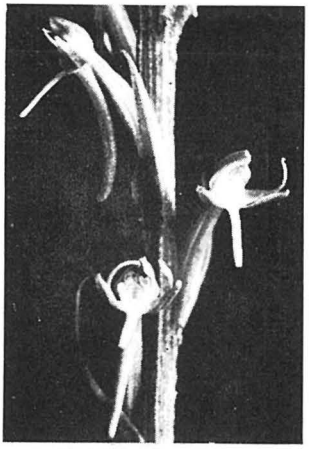
var. **Wilfordi** forma **bukoense** Hiyama, nov. f.

Caulis petiolusque pilis 1-2mm longis patentibus pilosus.—Nom. Jap. Buko-mitsubafûro, nov.

Hab. Hondo: Mt. Buko, Prov. Musashi (S. Okuyama—type in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo, #60036).

○イヨトンボの新産地 (榎本一郎・山崎 敬) Ichiro ENOMOTO & Takasi YAMAZAKI: A new locality of *Peristylus iyoensis*

イヨトンボは四国，九州から知られているが，現地でも個体数の少ない，稀品にぞくす種類である。榎本は 1961 年 8 月 8 日に千葉県君津郡鋸舞で，ロゼット状の葉が，丁度ノギランとショウジョウバカマの中間のような形で，ラン科植物の根をもったものを発見した。花は咲いていなかったが，イヨトンボに似ているので，栽培開花させたところ，細く 3 裂する唇弁の特徴から，イヨトンボであることを確かめることができた。生育地は谷津にある田のわきの崖の湿った場所である。わずかの面積に 5～6 株しかみつからなかったので，絶滅する恐れがある。今まで知られている産地は次のようである。長崎市外喜々津村，愛媛県喜多郡立川村，徳島県名西郡神領村，淡路島育波村。千葉県は以上の産地とかなりはなれているが，途中の東海地方あたりにみいだされるのではないかと思う。



Peristylus iyoensis. ×1.5.

(東京都中野区[redacted] 東京大学理学部植物学教室)